

平成 21年 4月 6日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720139
 研究課題名（和文） テキストにおける「論証の仕方」と日本語学習者の文章理解・作成の相関の解明

題名（英文） The effect of text rhetoric on Japanese learner's comprehension and composition

研究代表者
 甲田 直美（KODA NAOMI）
 東北大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：40303763

研究成果の概要：

外国人の日本語習得過程における読解過程の解明、特に、異なる言語間、文化間、さらには日本語習熟度の違いにおける読解ストラテジーの解明を行った。異なる言語間、日本語習熟度の違いにおける読解ストラテジーの差と自然な文章構造としての「日本語らしさ」を求めた文章作成との相関を得た。各学習者が好み、または理解しやすいテキストのパターンを明らかにし、日本語特有の論理構造の習得、そして読解や作文をより容易にする学習方法への応用を図った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	400,000	0	400,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	150,000	1,650,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：(1) 日本語教育 (2) テキスト (3) 文章理解 (4) 文化 (5) 対照言語学
 (6) 論理 (7) 推論 (8) 文章作成

1. 研究開始当初の背景

読解過程における文化差を考える上で契機となったのは甲田(2003)である。

甲田(2003)は、外国人日本語学習者の日本語読解プロセスを考察した。

課題は、日本の大学で勉強する留学生（平均日本語学習歴 42.5 ヶ月、日本滞在歴 33.3 ヶ月、出身は中国と韓国）が母語ではない日

本語をどのように読むかというものである。文章は、文庫本で4ページの量の日本語の説明文である。

文章は全部で9段落からなり、①～⑨段落の文章構成は、

「起①→承②③④→逸⑤→転⑥→前(⑥)の具体例⑦→結⑧→補足⑨」となっている。

難しい段落は、第5段落と第6段落で、途中で話題が逸れるという予告も明示もなしに別の角度から主題が眺められる。

読解の過程で、それぞれの段落が理解出来ているかを示したのが次の表である。

表 . 段落要旨の正当者人数の割合

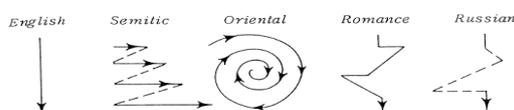
段落番号	1	2	3	4	5
	<u>45%</u>	85%	96%	79%	<u>38%</u>
6	7	8	9	全体要約	
<u>55%</u>	92%	92%	<u>44%</u>	79%	

このように、読み手に対して負荷のある文章構造をもつ日本語を、外国人日本語学習者はどう理解しているのでしょうか。読解途中のどの場面で理解につまずき、どのような全体像を構築しているのだろうか。このような観点から、読解過程における部分要約の履歴と全体の要約文をもとに、読解過程と理解像としての文章構造の相関を考察し、文章構造に即した読解ストラテジーの選択の重要性を指摘した。

外国人日本語学習者がどのように日本語の文章構造の理解像を得ているのかに関して、要約文生成のデータをもとに理解過程と理解像の関係に焦点を置いた。Hinds (1997)、Horiba (2000)、館岡 (1998) らの研究で、「起承転結」をはじめとする日本語の文章は、循環的論理構造で、読者依存型の文章理解であり、外国人における日本語学習や文章理解に影響を及ぼすことが指摘されている。Kaplan (1972) は英語と他の諸言語とを対比し、パラグラフ構成において、英語では線状性が好まれ、他の言語では屈折を含むか、渦巻き状に議論が展開されることが図示され

ている。

図 Kaplan (1972) におけるパラグラフ構成の文化差



まず、読解ストラテジーの洗い出しをした。

使用された読解方略

- I. Bottom-up strategy
 1. Comments on local statement
 2. Questions on local statement
- II. Local coherent strategy
 3. Comments on local context
 4. Comments on local context structure
 5. Questions on local context structure
 6. Questions on local context (content)
- III. Top-down strategy
 7. Comments on global structure
 8. Questions on global structure
- IV. Hypothesis-testing strategy
 9. Prediction
- IV- i . Repair strategies
 10. Repair of content
 11. Repair of structure
- IV- ii . Problem solving strategy
 12. Understanding of content
- V. Transaction strategy
 13. Personal based interpretation
 14. Personal based question

日本語母語話者によって使用された読解方略の割合は次表の通りである。各段落にお

いてどのようなストラテジーが用いられているか、被験者ごとの割合の平均をとった。

表. 使用された読解方略の割合(～全体における)

Bottom-up	Local-coherent	Top-down
46%	24%	13%
Hypothesis-testing	Transaction	
13%	4%	

表. 各ストラテジーが各段落で使われている割合

Strategy	1	2	3	4
5	6	7	8	9
Bottom-up	6%	15%	15%	12%
14%	9%	6%	12%	11%
Local coherent	1%	17%	16%	19%
1%	9%	22%	15%	0%
Top-down	12%	0%	0%	0%
28%	19%	0%	8%	34%

段落番号の1、5、6、9においてはTop-down strategyが多く用いられ、逆にLocal coherent strategyが少なく用いられていた。Local coherent strategyは第2、3、4段落、第7、8段落で多く使われていた。

Top-down strategyが多く用いられている段落は、外国人日本語学習者が理解できていなかった段落と一致していた。すべての段落を通じてBottom-upストラテジーはまんべんなく使われていた。これはその都度(段落ごとに)内容を理解する際にBottom-upストラテジーを用いるためである。これに対してTop-down strategyとLocal coherent strategyは相補的に用いられていた。母語話者の場合には、段落によって読解ストラテジーが使い分けられている。第5、6段落のよ

うに既出文脈との整合性が見つからない場合にTop-down strategyを用いている。

以上のような、ある文化で論理的と思われる文章を、他の文化の者がどのように読むか、読解過程の文化差についての考察が必要と感じられた。

異なる言語、異なる文化間において用いられている論理や思考が異なるという研究については、社会心理学の分野において西洋vs.東洋での比較を行っている。

Koda, N.(2003)で示したように、日本語と中国語・韓国語母語話者との比較では、同じアジア圏でも違いがあった。

日本語母語話者の読解ストラテジーでは読解途中に話題の変更や逸脱があるとトップダウンストラテジーを効果的に用いて対応している。

図. 日本語母語話者の読解ストラテジー(甲田, 2003)

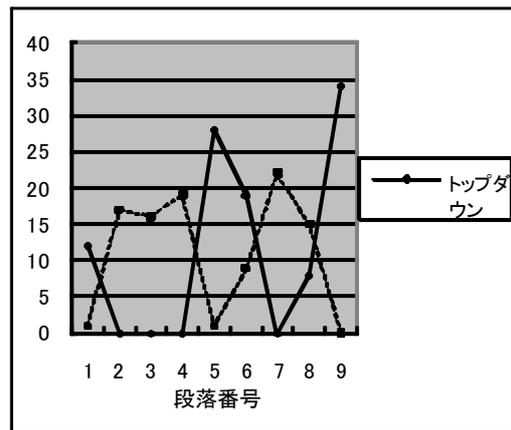
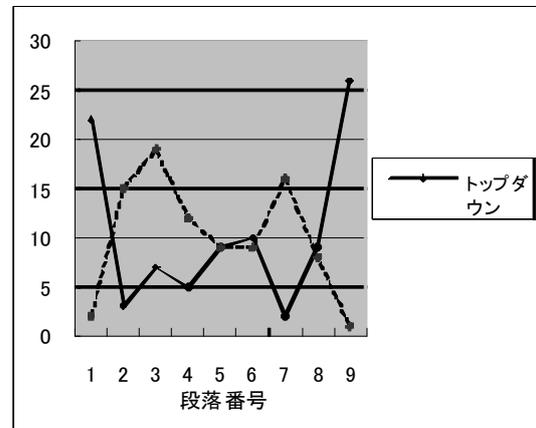


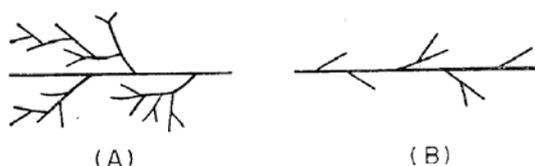
図. 外国人日本語学習者の読解ストラテジー(甲田, 2003)



外国人日本語学習者は、文章全体の主旨をつかむことができても、上級レベルの学習者でさえも、文脈の流れを捉えるのは難しかった。これまでの議論では西洋・対・東洋と二極化しすぎており、実際の日本語教育場面で直面する読解や作文の指導に有益な議論となりえるものではなかった。単なる二分化の議論に終始することなく、各学習者の特性を明らかにし、論理の差異を相対化する必要があった。

こうした文章読解への研究の一方で、古くから Legett や Kaplan によって異なる言語間のパラグラフ構造の違いが指摘されていた。

図. レゲットの樹 (Leggett, 1966)



しかし、直観的なパラグラフ構造の違いだけではなく、実証的にデータを集め、以下で述べるような他の諸要因の規定も含めた考察が必要のように思われた。

2. 研究の目的

外国人の日本語習得過程における読解過程の解明、特に、異なる言語間、文化間、さらには日本語習熟度の違いにおける読解ストラテジーの解明を行う。文章読解において得られた知見を、文章構造としての「日本語らしさ」を求めた文章作成に活かそうとするものである。

3. 研究の方法

談話・テキストの読解データを収集し、言語の特性に着目した言語学的分析と、読み手の読解プロセスを探る言語-心理学的手法の二方向から進めた。人々が持つ先行信念や論争的な問題に対する態度が、新たな情報に対する反応にどのように影響するかを、理解、再生、証拠の評価、事後の信念の変化を用いて検討した。論争的問題に対する様々な証拠の解釈は、認知的処理に対する個人の信念や特性によってどのように影響を受けるのか、さらに、論証方法、伝えるための効果的な文章構造、論理構造を信念の変更のデータをも

とに提示した。情報の受容スタイル（理解、納得の型）の個人差と文章読解との関係を解明するために、文章における論理構造（例えば演繹的 vs. 帰納的、継時的か全体的かなど）によって既存の情報や信念がどのように変化するかを考察した。意思決定や情報を取得する際に、相似と同等性に基づいて判断するか、カテゴリー的認識やルールに基づいて判断するか、経験に基づいた知識を信頼するか、あるいは抽象的分析に基づいた知識を信頼するかについて、各言語間の文章・談話構造の比較と、各言語話者の比較に基づいてデータを収集した。日本語、中国語、アラビア語、タイ語、英語、韓国語の調査を行った。多言語間における、認識論的な信念と論理的思考、言語理解の動的プロセスを求める文化横断的研究として成果を公表した。また、単に言語と言語を比較するだけではなく、各個人の理解・学習スタイルのデータも採取し、文章理解との相関の解明に加え、採取した理解・学習スタイルのデータを分析した。

4. 研究成果

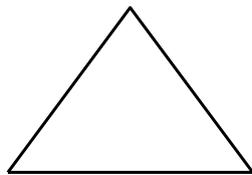
テキストで用いられる論証の仕方がどのように読み手の情報の更新に貢献するか、あるいは障害となるか、どのような説明方法が効果的であるかは、各言語間における「自然な」文連鎖への認識の違いに左右される。異なる言語間、日本語習熟度の違いにおける読解ストラテジーの差と自然な文章構造としての「日本語らしさ」を求めた文章作成との相関を得た。各学習者が好み、または理解しやすいテキストのパターンを明らかにし、日本語特有の論理構造の習得、そして読解や作文をより容易にする学習方法への応用を図った。文章読解の仕組みについて、文章読解のモデル、文章読解に影響する認知のしくみ、文章読解と教育、文章読解の個人差および文化差について明らかにした。

テキストの理解には、テキストの要因、読み手の要因、読み方要因（甲田・天野 2005）の三者が関わっている。テキストの要因としては、テキストのジャンル、長さ、難易度、話題等が、読み手の要因としては、読解のスキル、リーディングスパン、年齢、動機、文化的背景が存在する。読み方要因としては、読みの目的、制限時間の有無、読むことに伴って実行される課題（後で質問に答える、考えを口に出しながら読む等）が存在する（図）。読み方要因は、読解における推論生成の実験の遂行にあたっては van den Broek, Fletcher and Risden (1993)にあるように、読みの方向付け（教示、目標など）と読みを測るタスク（プロトコル、記憶量、質疑応答、語彙決定など）に区別することもできる。これらの要因が複雑に絡み合って読解に影響している。データの採取では、それぞれの要因のうち、

どの要因が理解のどの側面に影響を与えているのか、読みの理解モデルについての全体的な見通しを得ていく必要がある。テキストの特性に着目した言語学的分析と、読み手の読解プロセスを探る言語-心理学的分析の二方向から研究を進め、どのようにテキスト理解が成立するのか、それぞれの要因の精査及び相関の研究が必要となる。

図 テキストの理解を決定する三要因

読み手：スキル、リーディングスパン、年齢、動機など



テキスト題材：ジャンル、長さ、難易度、話題など
読み方：目的、読解時間、課題の種類など

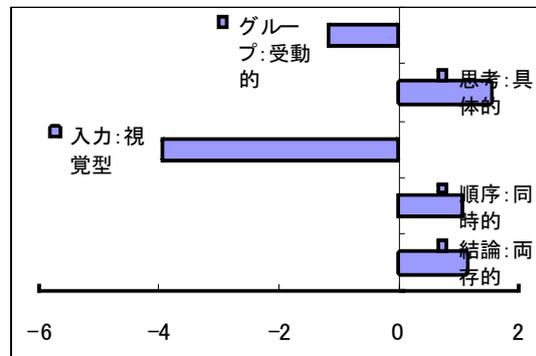
また、読み手の属性として、読み手の学習・思考スタイルがある。図は日本人大学生の学習・思考スタイルである。以下の結果と読解過程との相関を得た。

図では、項目名の次に傾きの名前(受動的、具体的、視覚型、同時的、両存的)を示した。

表 日本人大学生 116 名の学習・思考スタイル (各特性に対する値)

参加・グループ (能動性)	-1.19
思考の好み (具体的)	1.53
情報入力 (言語)	-3.95
理解の順序 (同時)	1.07
両存特性 (両存)	1.13

図：日本人大学生 116 名の学習・思考スタイル



読み手の学習・思考スタイルは、文章読解にも影響する。甲田 (2008) は、読み手の持つ学習・思考スタイルがどのように読解に影響するか調べた。フェルダ-の学習スタイルの 4 項目 (Felder and Silverman, 1988) ((1) 参加・グループ、(2) 思考の好み、(3) 情報入力、(4) 理解の順序) に、議論の論理構成への嗜好、結論の出し方に関する項目 ((5) 両存特性) を加えた 5 項目を調査した。両存特性とは、

「たとえ相反する意見であっても多角的に述べられる方が深みを増すと考えるか、あるいは、関連のない意見は述べない方が議論として良い構成であると考えるか。」

というものである。この項目を加えたのは、文章の理解、特に説明文や議論の理解には、結論の出し方についての嗜好が影響すると考えられるからである。

文章読解に影響する要因については甲田 (印刷中) として整理した。文章読解に影響する要因に加え、これまでの文章読解研究が教育面に貢献する点と、過去の研究の整理、本報告で示したような多角的な読解活動への考察を含むものである。

今後の展望としては、この研究で得られた文章読解の成果を文章作成のための教材に活かすことが望まれる。これについては、現在作成中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 甲田直美「日本語のレトリックとテキスト」『人環フォーラム』23号、24-27、2008、査読無
- ② 甲田直美 「テキスト理解の規定因－読み手の受容スタイルと論証パターンから」『言葉と認知のメカニズム』、589-601、2008、査読無
- ③ 甲田直美 (Naomi Koda) Balancing Contextual Effect with Processing Effort: Assessment of Relevance Theory. *Culture* 70-1/2, pp. 387-400. 2007 査読無
- ④ 甲田直美 (Naomi Koda) Connective Interference and Facilitation: Do Connectives Really Facilitate the Understanding of Discourse? *The Annual Reports of Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University*, 56.pp.29-42. 2007、査読無
- ⑤ 甲田直美・廣田卓也「説明的文章の要約作成と文章理解」『パイディア』14、pp.127-134、2006、査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 甲田直美・スライマーン アラー エルディーン「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果－アラビア語母語話者の場合－」日本心理学会、2007年9月18日、東洋大学
- ② 甲田直美・王其莉・楊雅銀 「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果－中国語母語話者の場合－」日本教育心理学会、2007年9月17日、文教大学
- ③ Naomi Koda Cultural Thought Patterns: A Case Study of Arabic and Japanese. *Comparative Literature and*

Linguistics, ESCL: Egyptian Society of Comparative Literature、2007年4月29日、Cairo University

- ④ 甲田直美「文章における論証の仕方が信念の変化に及ぼす効果」第70回日本心理学会、2006年11月5日、九州大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~nkoda/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲田 直美 (KODA NAOMI)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：40303763

(2) 研究分担者

なし ()
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：